

---

# 千年の終止曲

吉河那由他

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千年の終止曲

### 【Nコード】

N4225V

### 【作者名】

吉河那由他

### 【あらすじ】

主人公である、高校生・宮代智也は、突然の両親の死を経験しながらも、普通の生活を送っていた。

しかし、その数カ月後、玉響学園の理事長を名乗る男が、智也の前に現れる。

玉響学園とは、複雑な事情を抱えた者、人ならざる能力を宿した者が集まる学園だった。

何故男は、主人公の前に現れたのか？主人公の隠された秘密とは？玉響学園の目的は？

癖のある玉響学園の教師生徒と、平々凡々の主人公が織り成す、奇々怪々の物語。

千年の終止曲、開幕。

## 一話・通告（前書き）

初めまして！作者の吉河よしかわ那由他なゆたです。処女作ですので、意味が通らない文があるかもしれませんが、頑張つて書いていきますので宜しくお願いします！

## 一話・通告

両親が死んだ。

文字で書けばたった六文字しかない事實は、まるで水滴を垂らしたかのように、俺の中で波紋を立てながら広がった。

何で？いつ？どこで？どうして？何で、死んだ？

疑問は何一つ浮かんでこなかった。死んだ。そのことが、深く深く突き刺さるだけだった。

久しぶりの三連休で、かといって何処かに家族水入らずで出かけるわけでもなく、横になりながらテレビをみる。

偶々テレビを付けたらやっていて、バラエティー番組の再放送だ。時々小さな笑いを起こすだけの、つまらないとまではいかない、かといってそこまで面白くないといった、中途半端な内容のテレビ番組。

それでもやることのない俺は、ぼーっとしながらその番組をみていた。テレビの中の笑い声が大きくなった瞬間、タイミングを謀ったかのように、電話が鳴った。

2コールくらいまで、母さんが父さんが出てくれるだろう、何て思った。

けれど、二人は買い物に出かけたんだっと思ったと思えば、未だ鳴り続ける電話に向けて小さなため息をこぼし、テレビの音量を下げながら受話器をとった。

「もしもし」とだけ告げれば、受話器の向こうから男の声が聞こえた。

『宮代さんのお宅ですか？』と。

父さんだろうか？と一瞬思ったが、父さんにしては声が若すぎるし、第一自分の家に宮代さんの家？なんて問いかけはしてこないはずだ。

「どなたですか？」と若干訝しげに尋ねれば、男の人は機械的な声色で、まるでその台詞をいい慣れているかのように告げた。そこで告げられた、一つの事実。

『ご両親が、亡くなられました』

音量を下げてはすのに、テレビの中の笑い声は、さっきよりも大きく聞こえた。

## 二話・両親の死

事故死だった。

居眠り運転をしていたトラックに二人とも跳ねられたのだという。母さんは即死。父さんは辛うじて意識があつたらしいけど、病院に行く途中、救急車の中で息を引き取った。

二人の遺体を見たとき、「ああ、二人は死んだのだ」と、怒りも疑問も焦りも悲しみも浮かぶことなく、純粹にそう思った。

しばらくして、父の姉である洋子伯母さんが病院にきた。洋子伯母さんは、声を押し殺しながら泣いた。泣きながら、俺を静かに抱きしめた。

抱きしめながら、「智也ちやは、私が守るからね」と嗚咽交じりに言った。

高校生になった俺が、大人の人に抱きしめられることなんて層々なく、此処には俺と洋子伯母さんと両親しかいないはずなのに、少し恥ずかしくなった。

同時に、少し嬉しくなつて、懐かしくなつて、悲しくなつて、そして、泣いた。

両親が死んで、二ヶ月がたった。

葬式とか火葬とかは全部洋子伯母さんが仕切ってくれたので、一段落、といったところだろうか。

四十九日も過ぎ、段々と両親が死んだという事実について、落ち着きを取り戻した今、俺は学校に通っている。

両親が死んで初めて学校に言ったときは、先生や友達が気を遣ってくれていた。

それがどうも落ち着かなくて、少しばかり嫌だなあと思ったが、今では皆普通に接してくれている。今の俺にとっては、普通がとて

もありがたかった。

時々、家に帰っても「おかえり」が無いことに、寂しさや喪失感に襲われることがあった。

しかし、友達と話したりからかいあったりする内に、少しずつなくなっていく。

両親が死んで、二ヶ月がたつ。

俺は今、幸せに暮らしている。

プルルルル……。



### 三話・電話

「ただいま」

今この家には、俺一人しか住んでいないはずなのに、やっぱりまだ「ただいま」が抜けないらしい。言っても、返事がくるわけでもないのに。

まあそれも、今となっては慣れてきたことなただけ。

でも、今日は違った。

「おかえり」という言葉の変わりに、奥のリビングから電話の鳴る音が響いた。

反射的に止まる体。あの日以来、どうも電話の音には敏感になってしまっている。

ハッ、として直ぐに靴を脱いで受話器をとる。もう、誰かが取ってくれるだろうなんて思うことはなくなった。

「……はい、宮代みやしろですけど」

『あ？宮代？何で宮代？宮代って誰だ？おーい、この電話番号間違ってるじゃねえ？』

受話器の向こうは非常にざわついていて、そのざわつきに負けな位の大音量で喋る、低い男性の声。

思わず受話器から耳を離してしまっただが、それでもその声は部屋中に響いた。

こっちの事などそっちのけで、疑問ばかりを並べる声に、俺は思わず「は？」と声を出すところだった。

『あ？これで合ってるの？でも宮代って……ああ、そうか、はいはい。成る程ね。どつりで……っつーことは、お前みまが宮代智也みやしろちよ？』

何を納得したのか、その男性は一人でそうぶつぶつ呟いた後、ようやく声の方向を俺に向けた。………ちょっと待て、どうしてこの人は、俺の名前を知っている？

何かの勧誘の人か？いや、それにしても言葉使いが汚い。高校の先生にも友達にも、こんな声の人はいない。

不信感ばかりが募る。このまま切ってしまったてもいいだろうか、と思い始めた時、受話器から甲高い笑い声がした。

『くはっはア！どうやら随分と警戒心が強いらしい！頼むから切らないでくれよ？電話番号を再び押すのは、すげえ面倒だからなあ』

何で、と思わず声に出してしまいそうになるところを飲み込んだ。どうして分かったのだろう、自分が受話器を切ってしまいたいと思ったことを。

「………どなたですか？」

ここで俺はようやく、まともな返答をした。

男の人はその問いに、「あ？」だの「あー」だの何だかよく分からない感動詞を連ねた後、「まあ、いいか」と呟いた。

頭にはてなマークを浮かべながら、答えを待っていると、後ろから急に風が来た。

どうしたのだろう、窓は閉めているはずなのに。

髪がなびく中、受話器を持ったまま、後ろを振り向いた。

「………は？」

今度は、飲み込めなかった。

だってそこには、真っ赤なスーツを着た、ひよる長い男性が、口元に弧を描きながら立っていたのだから。

「俺は、京極イツキ。国立玉響学園たまゆらの、理事長だ」

受話器からの声と目の前からの声が重なった。

## 四話・来訪

「……た、玉響、学園？」

「あ？……へえ、息子の方は、存在すらしないのか。くはつはア！非常に面白い！その警戒心の強さは、きつと親父似だなあ！」

何だ何だ、一体何がどうしてこうなっているんだ？どうして俺の名前を知っている？何で俺の家に来ているんだ？玉響学園って何だ？どうして父さんを知ってるんだ？この人は、一体？

様々な疑問が頭の中を行ったり来たりしている。どうやら人間は理解しがたい状況に突然陥ると、疑問ばかりが浮かんで、体が全然動かなくなるらしい。

受話器を持ったまま、目の前の男 京極イツキと言っただろうか はそんな俺の姿をみると、スーツと同じ色の赤い靴を鳴らしながら、俺に近づいてきた。

「あ？何だ、パニックってんのか？あー、そりゃあ無理もねえか。いきなり知らねえ奴がきて「どうも」なんて言えた奴を俺はみたことかねえ！くはつはア！」

手に持っている受話器と、目の前の男の声が重なる。

風は直も吹き続けていて、後ろにあるカレンダーが捲れる音が聞こえた。

「……つと、俺の体験談は別にどおでもいいんだ。今何時だ？つて、オイ！もう時間ねえじゃねえか！」

未だに呆然としている俺を尻目に、京極イツキと名乗った男は、壁にかけられた時計を見てはそう口を開いた。

そして、がしがしと面倒そうに自分の髪を搔いては、一つ咳払いをして俺を見下ろす。

真っ赤なスーツを着ている時点で、不思議（というか変）な人だとは思ったけれど、瞳の色も不思議だ。

茶色の瞳が普通な俺ら日本人とは違って、この人の瞳は、水色と言うほど澄んではいなくて、かといって濁った川みたいにくすんではない、珍しい色。

この状況下で、呑気に思っていることではない。けれど、この状況で意識がそちらに向いてしまうくらい、何というか、人間じゃないみたいだと思った。

『「……っーわけだ、時間がねえから、単刀直入に言うぞ」』

ハッとして、目の前にいる彼を見上げる。

『「お前、玉響学園に來い」

ブツツ、と此処に来てようやく、電話が切れた。

その音とほぼ同時に、落ち着きを取り戻してきた思考も、終わりをつけた。

「……………は？」

ああ、俺はあと何回「は？」と零せばいいのだろう。

## 五話・風と共に

状況を整理しよう。

まず家に帰ったら電話がお出迎え。電話からは変な男の声。そしてたら突然の来訪。啞然する俺。そしていきなりの勧誘。「お前、玉響学園に來い」。

待て待て待て、待て、ふざけんじゃねえ。

「ふ、ふざけんな！いきなり家に上がりこんだと思ったら、今度は学園に來い、だ？意味分かんねえ！あんたは一体誰なんだ！？玉響学園って何なんだ！？何で、俺の名前を知ってたんだよ……何で、何で父さんのことを知ってるんだよ！」

久しぶりに大声を出したせい、それだけ言い終えると、少しばかり咳が出た。おまけに息も上がってしまった。

ぜえぜえと言っている俺を、京極イツキという男は、吃驚したように見つめた。

けれどそれは一瞬で、すぐに口元を歪めると、大声で笑い出した。それはもう、こっちが耳を塞ぎたくなるくらいの大声で。

「くはっはっはっはっはア！！ちょ、ま、笑えぶふっ！ふは、くはっはっはア！ゲホッ！おえっ」

幾らなんでも笑いすぎだと思う。その奇妙な笑い声のせいで、近所から苦情がきたらどうしてくれるんだ。それ以前に、笑われているということに非常に腹が立ってきた。

思いつきり彼を睨みながら、笑い事じゃねえ！ともう一度怒鳴ってやるうかと思つたが、ずい、と顔の前ギリギリに突き出された手に遮られた。彼は前髪を掻きあげながら、愉快そうに口を開いた。

「ふはつはア。いやあ、お前マジ笑える。怒鳴り方が先輩そっくりだ！はは、懐かしい」

息を呑んだ。先程まで怒りで興奮していた気持ちは、直ぐに冷めた。一瞬だったけれど、俺の頭の中を彼に支配されたような感覚が、全身を駆け巡ったからだ。

まるで隠し事がバレた時の、困っていて、悲しんでいる、そんな笑み。

何か声をかけなければいけない気がして、口を開いたのだが、またもや遮られてしまった。

ジリリリリ、という電話の音に。この音は確か、黒電話の音だったと思う。今はもう亡くなった祖母の家にあった古い黒電話を思い出した。

どこからだろうと思いつき見回すと、あろうことか目の前の彼が、何も可笑しくないような顔でスーツの中から黒電話を取り出し、そのまま普通に話し始めた。

開いた口がふさがらなかつた。ついでに目も点になっていることだろう。

声を掛けようとしていたはずなのに、最早声を出すことさえも出来なくなっている。

「あ？ああ、今此処にいるけど……あ！？急だなあオイ！お前が行かって……あ、いえ。すいません。はい、今戻るんで………チツ、あの野郎才好き勝手言いやがって……。っーことだあ、俺はもう帰る。玉響学園の件、じっくり考えておけよ」

ガチャリと音を立てて受話器を戻せば、スーツの中に黒電話を仕舞い込んだ。その行動も充分驚くべき行為なのだが、身を翻えだし、また靴音を響かせ初めた彼を見て、慌てて声を掛ける。

「ちよ、ちよつと待てよ！まだ質問に答えて貰ってねえし、第一俺は玉響学園になんて行かない！」

その声に彼は足を止めて、首だけこちらに向けた。

「あ？つたく、強情な奴だな……まあ、時間も無かったし、ろくに説明してねえから何だろおけど。まあいい、どうせお前は急がなくても玉響学園に来る他、宛てが無くなるんだ。……最後に、これだけ言っておくぞ。近いうち、お前の体内に不幸が生まれる。精々気をつけるこつたあ。じゃあな！」

待て、と言うよりも早く、突然の強風と共に彼は姿を消した。

ツーツー、と受話器から聞こえる音と、風の音が響く中、俺は彼が先程まで居た場所を見つめる。

「何なんだ………何なんだよ、一体……！」

膝からゆっくりと地面に降りていって、最終的に腰を下ろしながら、俺は一人、そう呟いた。

「つてえなあ……！もっと優しく運べなかったのかあ？あ？」

「五月蠅いわね、あそこで「待て」「つて言われたら、貴方、待つつもりだったでしょう？本当、これだから馬鹿は困るの。毎度毎度、貴方を運ぶこつちの身にもなつてよ」「



宮代智也の家から少し離れた民家の屋根。そこには先程まで宮代智也の家に居た男と、黒いスーツを着た女がいた。

女の周りには、風の音が異常に響いており、数枚の枯葉が渦を描きながら舞っていた。

女がふう、と息を吹けば、その音も枯葉もぴたりと止んだ。

「それで、どうだったのかしら？彼の様子は」

「あ？どうだったって、ああ、先輩にそっくりだったなあ！いやあ笑った笑った！久しぶりに先輩に会った感覚だったぜ？……………そうだなあ、やっぱりまだ状況が飲み込めてねえなあ。まあ、忠告はしておいたから、後はアイツしだいだよ」

男は喉を鳴らしながら、遠く張るかを見つめるような目でそう女に告げる。

女は一言、「そう」と呟けば、後は何も言わなかった。代わりに、今度は男が口を開いた。

「……………お前は心配じゃねえのかよ？一応戸籍上は、甥っつーことになつてんだろ？」

「心配に決まつてるでしょう。だからこそ、こうやって貴方に頼んでいるんじゃない」

「あ？まあ、そりゃあそうか……………大変だなあ、伯母さんつつうのもよ。なあ？洋子さん」

二人の間に、沈黙が流れた。

少しばかり時が経ったとき、その場には誰もいなかった。代わりに、風の音だけが大きく響いていた。

五話・風と共に（後書き）

まともに主人公喋ったの初じゃね……？

## 六話・平穩と衝撃

あの意味不明な男が突然家に押しかけてから、三日が経った。

疑問と苛立ちと、どうしようもない不安感が今もなお、俺の中でぐるぐると渦巻いている。今度来たら直ぐにでも警察に突き出してやると、密かに決心をした。

男は帰り際にこう言った。

《近いうち、お前の体内に不幸が生まれる。精々気をつけるこつたあ》と。

三日前のあの日以来、俺の頭はそのことについての疑問でパンクしそうだった。

何なんだ、不幸が生まれるって。体内ってどういうことだ。そもそも、何故あの男はそう言ったのだろうか。からかいにしては度が過ぎているし、あの状況でからかったとも考えにくい。

……両親が突然死んだのだから、もうとつくに、不幸が生まれていくっていうのに。

ああもう、段々苛々してきた。落ち着かない。砂をおふざけ半分ですしずつかけられている気分だ。

せっかくあの男が来るまで、平穩で幸せな生活を取り戻してきたというのに。

今度来たら、不法侵入で訴えてやる。

「であるから、このXをここに代入して……宮代？聞いてるか宮代ー」

「え、あ、はい。すみません」

先生に名前を呼ばれて、ハツとしてからそう答える。

いけないいけない、授業に集中しなければ。それじゃなくても、前回の小テストでは赤点ギリギリだったんだから。

あんな変な奴の事気にして、赤点でしたーなんてふざけているにもほどがある。

そのまま真面目に黒板に向かい、ノートを取っていると、襟が軽く引っ張られた。

勿論、俺の後ろに座っていて、そしてそんなことする奴は一人しかいないわけで。

「ばーか、注意されてんじゃねーよ。赤点取ったらマズいんだろ？」

「お前にだけは言われたくねえし。彰しょうだって前々回赤点だっただろ」

「残念、赤点じゃなくて、ギリギリでしたー」

「宮代、松崎まつみき！口を動かす位なら手を動かせ！」

先生の怒声の後に、所々から笑い声が聞こえた。

俺は笑いながら肩をすくめて、彰は「すみません」とへらへらしながら黒板に向かった。

隣のクラスは野球らしい。小さな人間が、走り出したりバットを振ったりする姿が窓から見えた。

チヨークが黒板に触れる音、刻々と終了時間に迫っていく時計。黒板をノートに写す音、小気味のいい、カキンツ、とバットがボールにふれた音。

まるで、三日前がただの悪い夢だったかのように、穏やかにゆっくりと時間は過ぎていく。

そうだ、これが普通なんだ。不幸が生まれる？何だそれは、どこかの御伽噺か何かか？

俺は今とても幸せだし、充実した毎日を送っている。これのどこが不幸だと言うのだろうか。

俺は間違いない、幸せ者

ツツがシャアアンツ！！

「きゃアアアッ！」

耳を塞ぎたくなるような衝撃音と、それに続いて聞こえた悲鳴声。思考が現実を追いついていかない。持っていたシャーペンが手から落下した。コロン、という音とほぼ同時に状況を飲み込んでいく俺。窓ガラスが割れた。破片がそこらかしこに散らばっている。割れたのは俺の席より二つ前の席隣のガラスだ。原因は、反対側の壁にぶつかって転がっている野球ボールのようだ。

「落ち着けお前ら！静かに！佐藤、大丈夫か！？原、佐藤を保健室に連れてつてくれ！」

「は、はい」

先生が声を張り上げながら、割れたガラスの隣席に座っていた佐藤に近寄る。

声に反応してそちらを向く。見た瞬間、ひゅ、と喉が鳴った。此処からでも見える程の血が、床にも机にも垂れていたからだ。顔と腕から垂れる血をみて、近くの女子は思わず小さな悲鳴を上げていた。佐藤は気絶はしていないが、顔面蒼白のまま、原君に連れられて教室を出て行った。

突然の出来事に、俺だけではない。他の生徒も、先生も、ふざけあつてた彰も、全員が驚愕した。

## 七話・それは止まることをしらない

授業終了のチャイムが鳴り、ホームランを打ってはしゃいでいたであるう生徒と、体育の先生が謝りに来た。

幸い、佐藤がガラスで切り傷を作った以外は怪我はなく、絆創膏だらけになった佐藤は友達と食事中だ。

あれほど騒がしかった教室も今はその話で持ちきりになっているだけで、誰も取り乱したりはしていなかった。

かく言う俺もその一人なわけで、彰と隣のクラスあまぐいの友達の明良と一緒にその話をしながら、弁当のおかずを箸で掴む。

「いやービビったな！いきなりガラスが割れて、佐藤が怪我すんだもんよ！」

「それは大変だったな。で、怪我のほうは大丈夫だった？」

「あー、何か出血は結構多いらしいけど、傷に関してはそんなに深くないしい」

「へえ、それは良かったな」

ひょい、とおかずを口に放り投げてから答えると、明良はペットボトルの蓋を開けながらそう言った。

彰はというと、購買部で買ってきたパンの袋が中々開かないらしく、時々うなり声を上げながら袋と奮闘している。

「よこせ、俺が開けてやるから」

「おう、サンキュー智也」

彰からパンの袋を受け取り、どうしてこれが開かなかったんだろう、と思つくらい、すんなり開いた袋を彰に返す。

ドオンツ……！

それとほぼ同時だった、その音が聞こえたのは。突然揺れる地面に驚きを隠せなくて、俺は思わず尻餅をついた。それは彰も同じだったらしく、ガタンツと椅子が倒れる音と同時に彰も倒れていた。唯一倒れなかった明良も、バランスがとれないらしく、机に掴まっている。

段々と大きくなる地鳴り。揺れる電気と、机や椅子の倒れる音。そして、今日二度目の悲鳴。

地震だと自覚するのに、そう時間はかからなかった。悲鳴と地鳴りが響く中、ノイズの音と共にスピーカーから声が聞こえた。

『只今、震度6強の地震が発生しました。生徒の皆さんは、周りの物に注意を払いながら、速やかに外へ非難してください。繰り返し、只今』

地震のときに流れる機械的な女の人の声。廊下の方で、窓ガラスが割れる音が聞こえた。揺れは一向に収まらない。このクラスだけではない、隣のクラスも随分とパニックをおこしているらしく、そこから中から騒音が聞こえる。

ようやくドアの近くまで来た瞬間、後ろから一段と大きい悲鳴と、鈍い音が聞こえた。後ろを振り返る。

俺は声を張り上げた。

「彰ツー！！」

俺のその声に続いて、明良も声を張り上げた。扉の近くにある本棚が、彰の上に倒れたのだ。

崩れ落ちる多くの本に埋もれたせいもあり、舞い上がる埃で視界が悪くなっているせいも在り、彰の姿は見えなくなった。

すると、先程までの地震が嘘だったかのように、大きい揺れは段々と小さくなっていく。

俺と明良はすぐさま倒れた本棚を元に戻して、彰を起き上がらせる。彰はどうやら気絶をしているらしく、額からは汗が滲み出ている。

どこか怪我をしたのだろうか、呼吸も荒く顔面が蒼白になっている。少し経つと、ヘルメットを被った先生が教室に来た。俺と明良は先に外へ避難していると言われたので、割れたガラスの破片を踏まないように、校庭へ向かった。

授業中のボールといい、先ほどの地震といい、一体何がおきているんだ。

校庭へ向かっている俺の頭に浮かぶのはそんな疑問と、二日前、変な男が言ったあの台詞。

『近い内、お前の体内に不幸が生まれる』

その言葉は鎖となって、俺の心臓を、締め上げていた。



## 八話・不幸

彰は左足を骨折した。

俺らが校庭で先生達の話聞いてる最中、救急車で運ばれた。

校舎には所々ヒビが入り、窓ガラスの破片も散らばっているため、危険ということで途中下校になった。

荷物は先生達が持ってこれる分だけを持ってきてくれたので、財布や定期券などは戻ってきた。

俺と明良は先生に、彰の見舞いに行きたいと言ったのだが、本人もシヨックが大きいだろうからという理由にしぶしぶ納得して、一週間後に見舞いにいくことになった。

明良は彰と家が近いし、俗に言う幼馴染という関係なので、相当心配らしい。気が気ではないみたいで、落ち着かない様子で俺に「じやあ、また」とだけ告げると、直ぐに帰って行った。

俺が何をしたわけでもないのに、俺の中には罪悪感に似た感情が色濃く出ていた。

あの男が言った、不幸が生まれるという台詞が、頭の中でぐるりぐるりと廻っている。

もし、あの男が言ったことが本当なら？ガラスも、地震も、彰も俺の所為ということになるのだろうか？

信じるものかと心に決めただけなのに、俺の頭の中はそのことでいっぱいだった。

自分の足を見ながら歩いていると、どん、と誰かにぶつかった。

謝ろうと一歩引いたが、俺にぶつかった人は、まだ小学校低学年位の女の子。

俺とぶつかったからなのか、そうじゃないのかは分からないが、その女の子は大き目いっぱい涙を溜めながら、俺を見上げていた。ハツとして、すぐに視線を女の子に合わせる。

「ごめんね、大丈夫だった？怪我は、ない？」

そう訪ねている最中も、不安が募る。この子が怪我をしてしまったのなら、それは俺の所為なのではないだろうか。

しかし、その不安は直ぐに打ち消された。少し乱暴に涙を拭った女の子は、無言のまま空に人差し指を向けた。

首をかしげながらその指の方向に視線を向ける。それが俺の視界に入ったとき、成程ね、と呟いた。

そこにあつたのは、木に引っかかってしまった赤い風船。

この女の子なら登って取ることなど不可能だが、俺だったら何とかいけそうだ。

待っててね、とだけ女の子に告げれば、近くの家の塀によじ登る（周りで歩いていた大人がぎょつとしていたが、そこは大目に見て欲しいと思う）。意外と近くに引っかかっていたためか、風船はいとも簡単に取ることができた。

そのまま塀から降りて、目を輝かせながら待っていた女の子に、軽く笑みをこぼしながら風船を渡す。もう放しちゃ駄目だよ？と告げれば、女の子は向日葵のような笑みをこぼして大きく首を縦に動かしてからぱたぱたと去っていった。

フツ、と肩に重くのしかかっていた何かが消えたような感じがした。西のほうでは、もう太陽が沈みかけている。早く家に帰らなければ。先ほどの地震で、家も相当な被害がでているだろう。

少し早足で家へと向かう。なんとなく、なんとなくだが、足が軽くなったような気がした。……やっぱりそれでも、言いよの無いぐちゃぐちゃとした気持ちがあるのには変わりないのだけれど、先程よりは随分楽になっている。

もうすぐ家に着くという時、あら、突然声がした。

「智也君じゃないの。どう？最近調子は？大変なのに、偉いわねえ」

「あ、こんばんは」

声をかけてきたには、近所のおばさんだった。両親が生きていた頃も、今も、何かと野菜や果物なんかを家に持ってきてくれる。今日もいい、と、茄子やトマトをくれた。

「ありがとうございます。すみません、いつも……」

「いいのよ、私と旦那だけじゃ食べきれないもの。……あ、そうそう、今日の地震大丈夫だった？うちも凄くてねえ、片づけが大変でねえ」

「そうだ、家の片づけがあっただ……じゃあ、俺はこれで。ありがとうございます」

「いいえ、呼び止めちゃったりしてごめんなさいね？……そういえば、智也君知ってる？」

軽く頭を下げて去ろうとしたとき、おばさんは心配そうにそう尋ねてきた。

足を止めて、首をかしげながら振り返る。

気のせいだろうか、鼓動が早い。それに、なにやら嫌な汗も流れてきた。

「え、と……何が、ですか？」

「さっきあっちの方で、女の子が一人重傷を負ったらしくてね？どつやう風船を取ろうとしたらしくて、一人で木に登っちゃって……。そのまま頭から、ですって。幸い、命に別状はないみたいんだけど、傷が深くてねえ……。智也君も気をつけて……」

気がついたら、家に居た。

心臓が直も大きく跳ね続けている。呼吸もどこか苦しい。冷たい汗が、体中に流れている。

俺があの子とぶつからなければ？俺が風船をとらなければ？俺が放し  
ちや駄目だよなんて言わなければ？

どうなっていたのだろうか。

無意識に、自分の両手をみる。何も無い、アニメや漫画みたいに呪  
文とか何か書かれているわけでもない、普通の手。

普通？果たしてそうなのだろうか。

この手は、人を殺める手なのではないだろうか、そう思った。

## 九話・奇人、再び

音を立てながらベットに倒れこむ。携帯がポケットから床に落ちたけど、そんなこと気にしていられる余裕は無かった。

あの後、俺はおばさんにもう一度会って、その女の子が入院しているという病院へ向かった。受付の看護婦さんにその女の子の様子を聞けば、知り合いだと判断したのだろうか。すんなりと容態を教えてください。おばさんが言ったとおり、命に別状はない。しかし、落ちたときに額を切ったらしく、縫わなければならぬほど深い傷らしい。

帰り道に感じていた、あの言いよりの無いぐちゃぐちゃとした黒い感情が、一層深くなっていくのを感じながら、俺は軽く会釈をして病院を去った。

家に帰ってきた頃には、もう時計は8時をまわっており、夕飯を作る気力も無かった俺はそのままベットに身体を放り投げたのだ。

「……………俺の、所為、なのかな」

ガラスが割れ、佐藤が怪我を負ったこと。突然地震が起きて、倒れた本棚の下敷きになって、足を折った彰。俺のとった風船をとろうとして、落ちた女の子。

そして、両親の死。

偶然が偶々重なり合っただけかもしれない、なんてそんなポジティブな考えは今の俺の頭には無い。

あの男が言うように、俺に不幸があるのだとしたら。これから先も、誰かを不幸にさせてしまいかもしれない。

そんな非現実極まりないことが、無性に怖い。

枕に顔をうずめて、クソッ、と小さく呟いた。

どれくらいそうしていただろうか。もう寝よう、と思って起き上が

ると床に落ちていた携帯電話が鳴った。

腕を伸ばして携帯をとる。画面に映るのは【非通知】の文字。こんな遅くに一体誰だろうか、と不思議に思いながらも、ボタンを押して耳にあてがった。

「はい」

「やあやあやあ、宮代智也君！元気だったかあ？因みに俺は今超絶ハッピーなう！あ？これじゃあ今とても幸せ今！になるな……。あ？何故俺が幸せかって？それはなブツッ」

思わず切ボタンを押してしまった。そしてそのまま携帯電話を思い切りベットにぶん投げる。さっきまでとは違う意味で、心臓が大きく跳ねていた。

忘れかけていたあの存在。唐突に現れて唐突に去っていった、まさに嵐といっても過言ではないあの男。俺をこんなに不安定にさせて、悩ませる原因の台詞を聞いた、玉響学園という学校の理事長。

あの声は絶対そうだ、京極イツキ、あいつだ。

息を整えながらも、俺の頭は一つの言葉で一杯だった。

何で何で何で何で、何で、何で。何で、と、ただそれだけ。

次はいつ掛かってくるのだろうか、ビクビクしながら携帯電話を睨みつける。

それは、突然だった。今日のボールとか、地震とか、そんなものは比べ物にならない位唐突だった。

「くはっはっはっはっはア！何でそんなに脅えてんだあ？超ウケるんですけど！くはっはっはっはア！ハハッ、ぐふ、おえっ」

耳を塞ぎたくなるような高い声と、変な笑い声。

俺と携帯電話の間に入るように、京極イツキがそこにいた。

## 十話・赤と黒

「ッうわっむぐッ！」

あまりにも突然の出来事に、脳内が着いていけなかったらしい。

頭のコントローラが聞こえなくなって、思わず悲鳴を上げそうになった。しかし、その声が周囲に響き渡る前に、後ろから口を塞がれた。イツキさん（憎たらしいけど年上なのでさん付けしてやろう）に塞がれたのだろうかと一瞬考えたが、当のイツキさんは俺の目の前に居て、両手で何やら気持ちのこもっていない乾いた拍手をしていた。では、俺のこの口を塞いでいるのは誰だ？

後ろを向こうとしても、口を塞がれているイコール顔が動かない。

誰だか確認する事もできない。

身じろぎしても、まったく動かないことから男の人だろう。そろそろ息をするのが苦しくなって、塞いでいる誰のかも知らない腕を取り外そうとしたとき、後ろからイツキさんの声よりも幾分高い声が響いた。

「手を放してほしいのなら、騒がないでください。周囲の方に説明をするのは面倒なので」

そう言うと、直ぐに手を放しそのままそくさとイツキさんの後ろへと移動した。

久しぶりに口で息を吸ったせいか、少々咳き込みながら、その姿を視界に捉える。

黒い髪に茶色の瞳。一見みただけでは普通の日本人で、格好も黒のスーツとド派手な赤いスーツを着ているイツキさんとは大違いだ。

誰がどうみても「普通」という言葉がぴったりと当てはまる男性なのだが、今の俺にとってはその人もイツキさんと同様「警戒しなけ

ればならない危ない人」。

後ろの壁に背中を預け、二人を思い切り睨む。

色々と言ってやりたいことがあるのだが、どうにも言葉が出ない。

そんな俺の様子を見てか、イツキさんはわざとらしく肩をくすめて、勝手にベットに腰を下ろした。

「何だ、色々と言いたそうな顔だなあ？……ははあ、そうか。ふうん、成程ねえ……くはっはっはア！どおやら、俺の言ったことが当たったらしいなあ！」

始めてあつた時は、そんなに気にも留めなかつた変な笑い声が、今となつては俺を苛立たせるだけの笑い声にしか聞こえない。

あからさまに眉間に皺を寄せながら、あの黒スーツの人にまた口をふさがれるのは御免なので、この部屋にしか響かないような清声量でイツキさんに向けて言葉を投げかける。

「……色々と聞きたいことがあるんです。いいですか」

此処まで苛立ちと怒りを抑えて冷静に話せる俺に、物凄く拍手を送りたい気分だ。

そしてこの言葉が、後に俺自身の世界を大きく変える言葉となった。



十話・赤と黒（後書き）

久しぶりの更新……だと……！？

十一話・全てを

「……………色々と聞きたいことがあるんです。いいですか」

ぽかん。きつと、目の前の男の表情を言葉に表すならば、これほど適した言葉は無いだろう。そんな表情をしたイツキさんの顔をみて同じく俺も呆けてしまった。

しかし、その表情は一瞬だけで、口角を気味が悪いくらいにあげれば、笑い出した。

「ぷふつ、くはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっア!!!」

……………この人は笑うことが仕事なのだろうか。

先ほどまでぽかんとしていたのが嘘のように、腹を抱え咽返るまで笑っている。……………この人のこの大音量こそ周囲の方にご迷惑をかけるのではないだろうか、黒スーツの人よ。

ちら、とイツキさんの隣に静に佇む黒スーツの人は、微動だにせずイツキさんでもなければ俺でもない何処か一点を見つめていた。

「何だ何だ何だ？あ？どこの風の吹き回しだあ？いきなり畏まって、つきり怒鳴り散らされるのかと思ったんだけどなあ！」

はぁ、と笑い疲れのため息をこぼした後、目にたまった涙を拭いながらそう尋ねてきた。

「……………お望みなら、今此処で怒鳴り散らしてもいいんですけど？」

「くはっはア！そう言うな、俺だって怒鳴られるのはご免だ」

じゃあ何で言ったんだよ、とは思ってても言わない。偉いぞ俺。相変わらず緩みきった口角を閉めることはせず、イツキさんは足組をしながら、まるでさらってきた人質に「明日貴方は死にます、残念」なんて言いそうな表情で口を開いた。

「で、お前は何が知りたいんだ？あ？何でも答えてやるぞ？」

まるで全部を見切っているかのような余裕のある笑みを貼り付けたイツキさんを、静かに睨みつける。といっても、この人にはその睨みも意味の無いものなのだろうけど。

俺は静かに息を吸う。何となく、鼓動が早い気がする。何でだろうか、緊張か？不安か？恐怖か？

ええい、どうだっていい。俺は聞きたいことが山ほどあるんだ。これは比喩じゃない。本当に山一つを埋め尽くしそうなくらいの疑問があるんだ。

もう一度、今度は大きく息を吸った。

「全てを」

俺がそう言つと、イツキさんは待ってましたと言わんばかりの表情になり、大きく腕を広げた。

「素晴らしい！流石は先輩の息子だ！実に予想通りの台詞を言ってくれる。答えは勿論、Yesだ。お望みどおり、お前の知りたいこと全てを教えてやろう！」

そうイツキさんが豪語した直後、パチン！と、部屋中に小気味いい音が響いた。何の音だと思ひ、辺りを見回す。目に留まったのは、先ほどまで微動だにしなかった黒スーツの人の指。

俗に言う、指パッチンというものだ。親指と人差し指が交差してお

り、軽く腕が上がっている。

音が聞こえてから、ほんの数秒。瞬きをするよりも早く、俺たちがいた部屋は辺り一面純白に染まっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4225v/>

---

千年の終止曲

2011年10月9日14時17分発行